



米・アイダホフォールズ市の学生16人が 東海村で11日間のホームステイ

東海村の国際親善姉妹都市、アメリカ合衆国アイダホ州アイダホフォールズ市の学生訪問団一行20人(13歳～18歳の中学・高校生16人+引率4人)がこの夏、7月29日から8月8日まで東海村を訪れ、村内16軒の家庭にホームステイ滞在しました。今月の「広報とうかい」では、学生訪問団の11日間の滞在中に、ホームステイ先となった東海村の子どもたちがどう過ごし、何を学び感じ取ったのか…などを多くの皆さんにお伝えしようと、ホストファミリーの一人となった酒井洋満さんご家庭の様子を「特別寄稿」という形でご紹介することにしましたので、どうぞお楽しみください。なお、村(総務部自治推進課ハーモニー・交流担当 ☎282-1711 内線1341)では、両市村の姉妹都市交流に“興味がある”“関心を持った”などという方からの多くのご連絡をお待ちしています。

特別寄稿

アイダホフォールズ市学生訪問団の ホームステイを通して

(石神内宿) 酒井洋満

この夏、私たち家族は、初めてホームステイを受け入れました。東海村と国際親善姉妹都市であるアメリカ合衆国のアイダホフォールズ市の学生訪問団一行20人が7月29日から8月8日まで東海村に来たからです。

わが家に来た子は18歳のジャスティン・サドラー君(Justin Sadler)、しっかりとした男の子でした。一方、わが家の息子は小学4年生の章照(9歳)と小学1年生の裕常(6歳)。また英語が話せない子どもたちにとっては、外国人が自分の家に来て来るということ、一緒に11日間を過ごすということは少し難しいかもしれないという心配もありました。

しかしそんな心配をよそに、子どもたちにとっては、彼との出会いが一生忘れないであろう大切な思い出となったようです。初めのうちは、彼に声を掛けることすらできませんでしたが、いつの間にか「ジャスティン!一緒に遊ぼう!遊ぼう!」と積極的に話し掛けるようになっていました。上手に会話できなくても、分かり合おうとする心、仲良くなりたいと願う気持ちがあれば、コミュニケーションが取れるということを幼いながらも学んだようです。一緒にサッカーや野球をしたり、テレビゲームを楽しんだり、海水浴に出掛けたりと、楽しいひとときを時間を忘れ、気が付けば深夜になってしまったこともありました。子どもたちにとって彼の存在は既にお兄ちゃん。いつしか



【左から】裕常くん、章照くん、亜紀子さん(洋満さんの妻)、ジャスティン・サドラーくん

大切な家族になっていたので。

そして私たちも、彼を通して多くのことを学びました。彼によれば、東海村の印象は「緑が多く、整然とした素晴らしいまちで人々も温かい」とのこと。彼から

見た東海村は、「Beautiful!!(美しい)」の二言に尽きるようです。みんなで一緒に出掛けた水戸市の弘道館をはじめ、村松山虚空蔵堂や各地の神社など、日本固有の文化の素晴らしさや、東海村の素晴らしさをあらためて再確認できました。そんな彼の言葉には、住民の一人としてとてもうれしく感じました。

子どもたちは時々、地球儀を見ながら「ジャスティンは元気かな? アイダホは夜かな?」などと話しています。テレビでアメリカのニュースが流れれば、それが難しい内容であっても、「ジャスティンの国のことだね」と興味津々です。この夏は、ジャスティンが加わり、家族5人の写真となりました。「出会いがあれば別れもある」。そんな言葉のように、彼の帰国の際には、涙、涙の別れとなりましたが、またいつの日か再会できることを楽しみにしています。

結びに、今夏の学生訪問団のホームステイ滞在中を通して、ジャスティンをはじめ、ホストファミリーの皆さんなど数多くの出会いがあったこと、またとない貴重な経験をさせていただいたことに、この場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。